

福島原子力発電所事故からの避難者の復興を里山看護学の視点から考える

東日本大震災から3年数か月。仮設住宅で最長8年暮らす人が出る予想とのニュースに、あの狭い暮らしにくい空間であと5年近く生活しなければならないとはと、復興の遅さに怒りがわいてきた。

宮城、岩手では商店ができ復興への道へ踏み出した、とはいえまだ多くは仮設の商店街でプレハブの小さな店が並んでいる。このような店で買い物をしたり食事をしたりしながら、いつになったら昔のような街ができるのだろうかと改めて被災の大きさを痛感する。それでも、自分たちで何とか復興させたい、「前向きに考えなくちゃ」と商店で頑張っている方々と話をしていると復興させなければと肩入れをしてしまう。

しかし福島の原子力発電所の事故で避難された方々の話を聞いていると、復興の糸口さえ見えないまま、「これから先どうしようか」と迷っている方が沢山いて、私たちにできることはないのかと考えさせられる。

ここ長野に来て初めて里山看護学という言葉聞いた。

里山・里海とは都会と山間部の中間点にあり、自然と伴に生きている地域と言われている。また、里山とはふるさとの原風景「ウサギ追いしかの山、小鮒釣りしかの川」のイメージだとも言われている。そこは畑から新鮮な野菜を手に入れ、近くでとれた新鮮な魚が手に入る、都会のように現金がなくても十分豊かな生活ができる地域が多い。そこには地域の強いきずながあり、お互い様の精神が生きている。と言われている。吉村の里山で生活する人々への聞き取り調査によると「毎日食べるものをある程度自分で作って食べて、自分が楽しんできた」「鍵をかけなくても近所の人が見ていてくれるから安心」「長年にわたる近所付き合いの中から培われたもの」などの語りがある。そして吉村は「地域の自然、風物、習俗、信頼、規範、ネットワークやこれらの要素とかかわることで得られる何らかの力が、暮らしにおける生きがいや幸福感、独居高齢者の生活の質などに影響を与える可能性があるという事がわかる」と述べている。

里山では自然からの恵みだけではなく、人と人のつながり、地域の文化がありそれが肉体だけでなく社会的にも、精神的にも健康な生活を送ることができる要因となっていると言える。

そして、福島原発事故から避難を余儀なくされた双葉郡の方々の話から多くの地域は里山・里海と言われる自然豊かな所だったことがわかる。「散歩する場所が沢山あって、よく散歩をしていた」「畑があって野菜を作って、そこから採れた野菜で漬物を作って・やることが沢山あった」「田畑から採れたものを食べていたから、お金なんてそんなになくても十分暮せた。米を買ったことはなかった」「山に行けば大きなキノコが取れて・・・。」「自分で釣ってきた魚を食べていた」と楽しみながら食料を得ていた事がわかる。また、近所との付き合いもたくさんあった。「近所に声を掛け合う人がたくさんいた」「子供たちが近くに住んでいたから、孫の世話をしたりして、さみしくなかった。」

「祭りのときは皆が家に来て、楽しかった」という語りが聞かれた。

それらが、原発事故によりある日突然、すべての山、田畑、海を奪われ、住み慣れた我が家に帰れるめどがないまま、地域のつながりもなくなりばらばらに暮らしている。そして、多くの不安、不満が聞かれた、ここに来たら食べるものまで全部買うからお金がかかる」「今は畑もないし、体を動かさないからダメになってしまう」「ここで釣った魚は食べられない」とこれまでの自然の恵みや、体を動かして物を作る楽しさを奪ってしまった。また、「畑で作ったものを孫に送ったら、娘に『なんで県外まで避難したのかわからなくなってしまおう』と怒られた」と家族のために野菜を作る楽しみさえなくなってしまった。そして「近所に知っている人がいない」「自分で運転するのが怖いから出ていない」「昼間から出歩いていると、遊んでいると思われるから狭い家でひっそりしている」と交流の機会もなくしている。社会的にも精神的にも不健康な状態で、体を動かす意欲も機会もなく過ごしながらか、「これでは体が弱ってしまうと」気にしながら生活している状況は健康からほど遠いと言ってよいだろう。

吉村の研究では「人間関係の絆」「集落のまとまり」「文化や伝統の継承」「自然との共存」のカテゴリーが重要であると述べている。そして里山の保健政策・施策の構築にはこれらのカテゴリーに関連する要素の活用が有用であると提言している。阪神・淡路大震災以降地域のコミュニティーを壊してはいけないと強調されてきた。しかし今回の原発の被災地では役場が避難せざるを得ない中で、集落がまとまって避難するなど考えられなかっただろう。そしてみなし仮設住宅で暮らしている方々は、家の近くに同郷の人々がいるのかさえ知らないまま暮らしを始めている。いつ双葉郡に戻れるかわからない人々には新たな絆作りが必要だろう。そのためには吉村の提案にあるように「文化や伝統の継承」につながるような催しを開催することも有効かもしれない。「自然との共存」も少しずつ福島県産の農産物、魚類が市場に出始めている。畑の産物が安全と認識されれば、地域の人々と畑仕事をする中で新たな「人間関係の絆」の再生に貢献できるかもしれない。現在の居住地は双葉郡ほどの里山・里海ではないがそれでも大都会から見れば多くの自然が残された地域のように見える。ここでの暮らしに落ち着こうとしている人々が、この地域で新たな「人間関係の絆」ができる援助を考えることが必要だろう。また住み慣れた地域に戻ろうとしている人々には若者へ伝えていける「文化や伝統の継承」の場を作るためのサポートが必要なのではないだろうか。

東日本大震災に対する災害看護は、看護師が復興にどのようにかかわることができるのか、手探りで役割を考えている時期だが、里山看護学の視点から地域の復興への看護師のかかわり方も考えられることを知った。